

マンソン孤虫症の1症例について

香西 徹行・岡崎 秀信・米谷 博・高樹 正浩・影井 昇
朝日 博子・**佐々木 豊

1 はじめに

マンソン孤虫症は稀な人体寄生裂頭条虫幼虫症であるが、日本において現在 200例をこす報告がある。⁽¹⁻⁷⁾

その他の地域では、東南アジア、アフリカ、アメリカ等で人体寄生例の報告がみられる。

マンソン孤虫はマンソン裂頭条虫のプレロセルコイドであり、第1中間宿主はケンミジンコ類、第2中間宿主は両棲類、爬虫類、鳥類、哺乳類及び人類で、終宿主は、犬、猫、虎、豹、狸等の食肉獣で、その小腸に寄生している。

今回我々が経験したマンソン孤虫症の1例について、臨床経過及び感染経路について検討したので報告する。

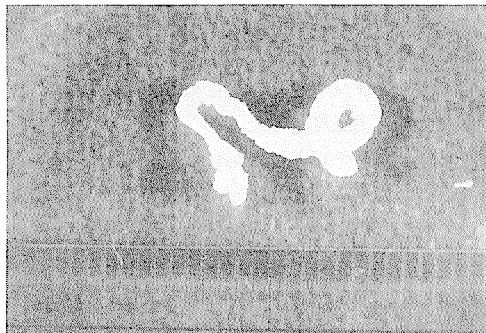
2 症 例

38才、女子、主婦

初 診：昭和53年12月6日

主 訴：約1年前より右下腿に出現。右下腿上部に虫体様の真直ぐな、約1.5 cm位の青緑色の色素斑あり、53年11月頃に少し隆起して皮膚は紫色を呈す。血管が浮きあがった様な感じで、その部位に蟻走感あり、又その部位は一定で移動はしない。受診の翌日に切開、白色、約26mmの虫体1条摘出。

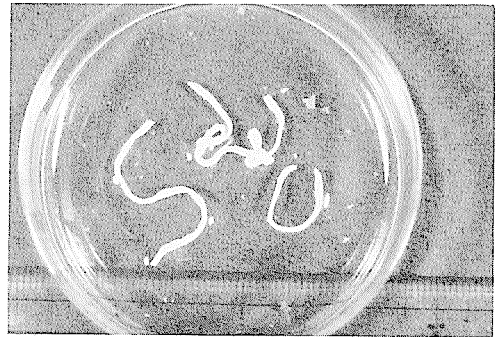
写 真 1



* 国立予防衛生研究所 ** 吉峰病院

摘出虫体所見：摘出虫体は摘出時は、やや活潑に運動しており、ホルマリン固定後の虫体は写真1の様に乳白色を呈し、体長26mm、最大巾2.5mm、一端は太く、堅い、その一端より溝状のすじがあり、頭部と考えられた。頭端より他端に向うに従って細く、薄くなる、体全体に細いしわがある。以上の形態から、マンソン孤虫 (*Spar-ganum manson i*) と同定した。

写 真 2



3 聞きとり調査

家 族：父、母、夫、長男、長女、次男及び隣人に、マンソン孤虫症並びに特記すべきものはなし。

嗜 好：蛇、蛙、淡水魚の喫食はなし。4～5年前迄井戸水を使用していたが、現在は水道水を使用。

ペット：数年前に犬を飼育していたが、現在は犬、猫の飼育はない、近所に飼犬や野犬は多い。

環 境：患者宅は高松市郊外五色台の山裾で、住居の前に溜池があり、近辺に蛇、蛙等が棲息している。又この附近の山にはイタチも時おり出没している。

4 調査成績

1 中間宿主調査

ⅰ プランクトン

昭和54年1月より11月迄、毎月1回、患者宅井戸水、患者宅前のかなば池北岸、かなば池南岸の3地点より採水し、1回約200個体のケンミジンコ類を鏡検したが、

プロセルコイドを検出する事は出来なかった。なお井戸水よりはケンミジンコ類の採集は出来なかった。

ii 両棲・爬虫類

7月下旬、トノサマ蛙、シマ蛇を捕獲し、トノサマ蛙よりはプレロセルコイドは検出できなかったが、体長1m20cmのシマ蛇の腹腔より、写真2に示す様にリグラ様幼虫を4匹摘出、頭部に吸溝があり、マンソン裂頭条虫のプレロセルコイドと同定した。

2 抗体価測定

第1表に示す様に、1月より10月迄の6回患者より採血して、その血清について、ゲル内沈降反応（オクテロニー法）を行ったが、マンソン裂頭条虫及び、その他7種の寄生虫抗原を用いた測定では、いずれも陰性に終わった。

第1表 ゲル内沈降反応（オクテロニー法）

抗 原	1/23	2/23	3/22	5/24	7/24	9/27
マンソン裂頭条虫	-	-	-	-	-	-
広節裂頭条虫	-	-	-	-	-	-
宮崎肺吸虫	±	-	-	-	-	-
ウェステルマン肺吸虫	±	-	-	-	-	-
肝 蛭	-	±	±	-	-	-
犬 回 虫	-	-	-	-	-	-
豚 回 虫	-	-	-	-	-	-
犬 糸 状 虫	-	-	-	-	-	-
C R P	-	-	-	-	-	-

5 考 察

マンソン孤虫の人体寄生の最初の報告は中国のアメイで1818年Mansonが行った。

日本では1886年に京都で尿道よりScheubeが見出し、その後各研究者⁽¹⁻⁷⁾の発表によれば200余の症例を数える事が出来る。

マンソン孤虫の寄生部位は下腹単陰部、腹壁、腹腔等が多く、腹部、四肢ではやや少い。この疾患は局所性腫瘍を主徴とする場合が多く、顎口虫、肺吸虫のそれと類似するがプレロセルコイドを摘出すれば容易に鑑別できる。又免疫学的診断法として皮肉反応、補体結合反応、間接蛍光抗体反応及び沈降反応も試みられている。

人体への侵入経路は、普通水中のケンミジンコ内のプロセルコイドを水と共に摂取するか、幼若なプレロセル

コイドを持つ第2中間宿主の生食によるものが多い。

今回の症例は腫瘍ではなく、血管が隆起し紫色の索状様であった点が、従来のマンソン孤虫症とは異なっている。

摘出された虫体は、*Diphyllobothrium erinacei* (Rudolphi, 1819) Faust, Campbell et Kellogg (マンソン裂頭条虫)のPlerocercoid (*Sparganum mansoni*: マンソン孤虫)と同定した。

免疫学的診断として、患者の虫体摘出後の1ヶ月後、2ヶ月後、3ヶ月後、7ヶ月後、9ヶ月後の計6回採血し、その血清についてゲル内沈降反応を試みたが、いずれも陰性を示し、他の寄生虫抗原、広節裂頭条虫、宮崎肺吸虫、ウェステルマン肺吸虫、肝蛭、犬回虫、豚回虫、犬糸状虫等についても陽性を示した抗原はなく、患者自身の皮膚その他にも症状を示さず、現在マンソン孤虫及び他の寄生虫の寄生はないものと思はれる。

感染源調査については患者宅の井戸水、患者宅前の池水の1~11月迄のケンミジンコ調査を行ったが、ケンミジンコ類にプロセルコイドを認める事は出来なかった。

第2中間宿主と思はれる、蛇、蛙の精検の結果、1匹のシマ蛇よりプレロセルコイドを検出し、この地域にマンソン裂頭条虫が分布している事を実証した。

終宿主と思はれる、イタチの捕獲が出来なかった事は今後の課題で引続きイタチ、犬、猫のマンソン裂頭条虫調査を行う予定である。

この患者の感染源は、淡水魚、蛇、蛙等の喫食もないので、プロセルコイドを持つケンミジンコで汚染された井戸水、池の水より感染されたと推定される。

6 ま と め

- 1) 患者の右下腿部より摘出した虫体はマンソン孤虫と同定した。
- 2) このマンソン孤虫症は腫瘍を呈さず、索状紫色の隆起を呈していた。
- 3) 池の水のケンミジンコ類には、プロセルコイドを認める事は出来なかった。
- 4) 捕獲したシマ蛇よりプレロセルコイドを摘出した。
- 5) 感染は井戸水又は池の水からが最も考えられるが、その裏付調査は今後行う予定である。

7 文 献

- 1) 岩田正俊：日本における寄生虫学の研究Ⅱ，
279，目黒寄生虫館，東京，1962，
- 2) 岩田正俊，甲斐田健治郎，木船悌嗣：マンソン
裂頭条虫の成虫の人体寄生例（第2例），寄生
虫誌，18(4)：413，1969
- 3) 鬼丸高寿，橋口良紘，坂本詮：腹壁より摘出し
たマンソン裂頭条虫症の1例，寄生虫誌，15
(7)：49，1966
- 4) 黄永彦，池内広重，湯田和郎：マンソン孤虫症
の1例，および宮城県地方におけるネコ，イヌ
のマンソン裂頭条虫寄生状況，医学と生物学，
80(3)：121，1970
- 5) 加藤允義：石精索腫瘍（Manson），臨床病理
17，67，1970
- 6) 石井明：マンソン孤虫症の間接蛍光抗体法によ
る診断，寄生虫誌，22，75，1973
- 7) 荒木恒治，中黒秀男，今岡昭夫，福永晶，大沢
直，松本信義，安原稔：マンソン孤虫症の2症
例について，寄生虫誌，25(5)，1，1976